46

なぜ日本では「ドナ」を志望する人が少ないのか

杉田暉道

日本では臓器移植に必要な医療面の設備および人的資源さらにこれに関係した法律の整備が行われたのにもかかわらず、臓器移植がなかなか行われない現状にある。この現状の主因は「ドナ」の志望者が少ないことにあることは明らかである。演者はこの問題は日本人の複雑な宗教心にあると考えた。以下これについて梅原猛氏の説を参考にしながら述べたい。

ここで考えねばならないことは、日本人は死を宗教的にどのようにとらえているかということである。これについては、先ず約一万二千年前から一万年間栄えた縄文時代の宗教について考察しなければいけない。そしてこの時代の宗教については、北海道のアイヌの宗教および沖縄の宗教によく保存されている。ここにその一例としてアイヌの熊送りの儀式を紹介しよう。

それはイオマンテである。イオマンテとは熊の霊を送るという意味である。アイヌ人は熊は死ぬとその霊は天にもどって神になる。そして天にもどった熊はこの世界では人間と同じ姿をし、人間と同様な生活をしている。しかし、この世に来るときには、また熊となって、体においしい肉や立派な皮をつけてくる。つまり熊はこの世の人間の世界にすばらしい土産を持ってきた客人であると考え、熊を殺して肉をいただき、熊自身にも肉を与えて神人一体となると考えた。このようにして熊送りの儀式を行うのである。アイヌ人は熊ばかりでなく、人間も動物も植物もすべて死ぬと霊は天にもどって神になると考えたのである。

この一例から明らかなように、この時代の宗教は二つの原理からできあがっていることがわかる。一つは人間と他の生物はいずれもこの地球の平等な生物であるという原理である。二つめはすべて生きとし生けるものは、永遠にその霊が循環するという原理である。

この葬式を中心とした縄文時代の宗教は弥生時代に入

ると稀薄となり、仏教が日本に移入されると、さらに縄文時代の宗教儀式が行われなくなった。なぜなれば、本来の仏教は衆生の死後については考えないという教えであったからである。したがって死体は適当な場所に放置されている光景がみられるようになった。

これが死者の葬儀を行うようになったのは鎌倉時代の新興仏教の祖師達がはじめて死者の葬儀を行うようになってからである。さらに江戸時代になると檀家制度が成立し、全国的に葬式、お盆、彼岸、年忌などの行事が広く行われるようになり今日にいたっている。

このように縄文時代以来の日本人の宗教の変遷をみると、死者を丁寧に弔い、祖先を崇拝するという習慣は、われわれがそのような信仰を正しく持っているかどうかということを考える以前に、生まれてから、次第に生長していく間に、自分が置かれている環境の中で習俗として身についてしまっているといえるのではなかろうか。

仏教といえば葬式仏教といって多くの人は仏教をよくいわないが、死者を丁寧に弔うという行為は、われわれのはるか遠い先祖から行われている儀式であることをもう一度よく見直す必要がある。さらに、仏教が日本に移入されて今日のように日本に定着したもっとも大きな要因は、葬式を宗教儀式としてとりいれたことにもあることをよく考える必要がある。

今まで述べてきたことから明らかな通り、われわれ日本人は、死者を生前の人と同様に人格者として丁寧に扱い、死体に傷がつくようなことは決して行わないで、あの世に完全なよい状態で送ることがもっとも良いと考えているのである。

われわれ医師は、上記の「ドナ」に対する日本人の複雑な宗教心を十分に考慮してこの問題に対処する必要があると痛感する。

（介護老人保健施設すこやか）